

カーテンの後ろにいる人に注意せよ



[Steven Hentges, Ph.D](#)

2018年11月15日(木) [安全](#)

米国食品医薬品局(FDA)のウェブサイトにアクセスし、BPA(ビスフェノール A)という単語を検索すると、皆さんがまさに BPA について最も知りたいことが書かれた重要な Q&A をすぐに見つけることができます。

[「BPA は安全ですか? – はい。」](#)

これはあまりにも短く、またそれを支持するものは何もないとして却下されてしまいがちです。しかし、「カーテンの後ろにいる人に注意を払わない。」と言ったオズの魔法使いとは違って、このカーテンの後ろにあるものに注意を払うべきです。

この一見単純と思える見解は、安全性の裏付けとなる証拠が必要な長年にわたるリスクベースの規制システムによって支えられています。BPA の安全性を理解するために、私たちが最初知っておくべきことはハザード(有害性)です。具体的には、BPA は健康に有害影響を及ぼすのかどうかであり、またどの程度の用量で有害かということです。

結局のところ、私たちは何世紀も前からずっと、[「用量によって毒であるか薬であるかが決まる。」](#)ということを知っています。2、3錠のアスピリンで頭痛は治るかもしれませんが、アスピリン 1 瓶を服用すれば毒として作用し、あなたの命を奪う恐れがあります。BPAをはじめ、私たちが日常生活で接触するすべてのものにこの原則が適用されます。

幸いにも、実験動物を用いた研究から、BPA についてのたくさんの良質な科学的情報が得られています。ごく最近では、FDA の上級科学者がほぼ 5 年間で費やして完成した最終[報告書](#)で [CLARITY コア研究](#)結果が発表されました。

この研究の範囲と規模は BPA にとっては前例がないもので、ヒトが一生を通じて BPA に曝露し続けても健康影響を引き起こす可能性はほとんどないことが示されています。FDA の主任研

研究員が宣言したように、「BPA は、典型的なヒト曝露レベルより遥かに多いいかなる用量であっても、明確で生物学的に妥当な有害影響を引き起こすことはありません。」でした。

ヒトの曝露レベルに関しては、特に、米国疾病対策予防センター(CDC)や世界中の同様の研究機関が実施した全国規模のバイオモニタリング調査という形で、膨大な量のデータが存在します。これらの研究から、ヒトへの BPA 曝露は極めて低いことがわかっています。

リスク評価で何が起きているかをまとめると、FDA は BPA が安全であるという結論を支持する非常に強力な科学的根拠を持っていることは明らかです。残念なことに、米国で役立つきたのと同様のリスクベースシステムは、ヨーロッパでは一般的に使われていません。「岐路に立つ欧州のリスク管理は普及するだろうか?」というタイトルで書かれたサイエンス|ビジネス®という最近の視点記事の中で、この相違の意味することが強調されています。

この記事はロンドンのクイーン・メアリー大学の名誉教授である Colin Berry 卿によって書かれました。Colin 卿は著名な教授であることに加えて、永年の公務の業績が称えられて、1993 年にナイト(騎士)の称号が授与されました。

欧州では彼の発言は重要であり、なぜ FDA のリスクベースの規制システムが効果を発揮するのかを強調しています。

「危険有害性の特定ではないリスク評価は、健康を守り、継続的な科学的発展を可能にする方法です。ハザードだけに基づく決定ではどちらも達成できません。」

「欧州は、科学的評価に先立って詳しい見解を得、リスク評価に先立って予防措置を取っていません。イノベーションは犠牲者です。」

健康を守ることは、科学的発展やイノベーションと相容れない訳ではありません。FDA が行ったようにリスク評価に適切な焦点を当てれば、両方が可能です。